



# 越前の刀工

- 会場 松平家史料展示室
- 会期 平成22年10月27日(水)～12月19日(日)

戦国～江戸時代の城下町には、様々な職人が集まり、産業や文化の担い手となりました。絵師や大工たちなどと並んで、刀鍛冶(刀工)もその一端を担っていたのです。

今回は当館に収蔵されている刀剣資料の中から、この越前・福井で活躍した、あるいはこの地にゆかりのある刀工の作品を展示し、彼らの来歴や業績についてご紹介します。

## 古刀期<sup>\*</sup>の刀工 ～藤島派～

※刀剣史上、日本刀が誕生した平安時代から室町時代末期までにつくられた刀を「古刀」、桃山期から江戸時代後期までの刀を「新刀」、幕末ころの刀を「新々刀」などと、作られた時代によって区別しています。

### 【藤島派(ふじしまは)】

南北朝時代、藤島庄(現在の福井市藤島町周辺か)に興ったとされる刀工の一門。当地にあったとされる藤島城の武士たちの需要に応えるため、藤島友重<sup>ふじしま ともしげ</sup>という刀工が定住したのがはじまりという。この一門は後に加賀国に移住し、江戸時代に入っても栄えた。越前にける同時代の刀工としては、ほかに越前打刃物の祖と伝わる千代鶴<sup>ちよづる</sup>国安等がいる。

## 美濃からやってきた刀工たち ～越前関～

### 【越前関(えちぜんせき)】

室町時代後期から末期に美濃国の関<sup>みの</sup>(現在の岐阜県関市)より越前へ移住した刀工の一群がいると考えられており、彼らを「越前関」と呼んでいる。兼法・兼則など、名に「兼」の付く刀工が多い。室町末期の彼らの作品には、下坂派の影響を強く受けたとみられるものがあり、彼らは最終的には康継を中心とする下坂派と一体化したと考えられている。

### 【兼則(かねのり)】

美濃から越前に移住した「越前関」の一人。「越前一乗住兼則」の銘のある脇指が現存する(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館所蔵)。一乗谷で作刀したという根拠がある数少ない刀工のうちの一人である。「一乗谷住<sup>かねのり</sup>」等の銘のある刀工はほかに兼法がいる。

### 【兼植(かねたね)】

「越前国兼植作/元亀二年三月十八日」の銘のある脇指が現存しており、元亀二年(1571)には越前で作刀していたことが分かる。美濃にも同名の刀工があり、美濃から移住した「越前関」と考えられているが、彼の作品には初代康継の影響を強く受けたと思われるものがある。

## 康継と下坂派の刀工たち

### 【下坂派(しもさかは)】

もとは近江国坂田郡下坂郷(現在の滋賀県長浜市近辺)を本拠とした鍛冶集団と考えられている。その中心はのちに徳川家康より葵紋を拝領した初代康継<sup>やすつぐ</sup>である。江戸時代初期に、結城秀康が整備する北庄城下町<sup>きたのしょう</sup>に移住し、一門集団を形成して、当地や江戸での刀剣需要に応えた。ただし下坂を名乗る刀工、また下坂派と目される刀工には、康継に先んじて近江より越前に移住した者もいるようである。また「豊原(現在の坂井市丸岡町)住」と銘のある刀も存在する。

### 【康継(やすつぐ)】→写真1

近江国下坂を本拠とした鍛冶集団の代表的存在として、江戸初期に越前へ移住、越前松平家のお抱え刀工となった。慶長年間には徳川家康に拝領し、葵紋の使用許可と「康」の字を拝領した。大坂夏の陣で焼け身となった古名刀を再生する「再刃<sup>さいじん</sup>」を手がけ、さらに古名刀を本歌として創意を加え模倣する「写し」の名手として広く名声を得た。2代没後、康継の家は江戸と越前に分立するなどしたが、両家とも将軍家・松平家のお抱えとして幕末まで代々作刀を続けた。

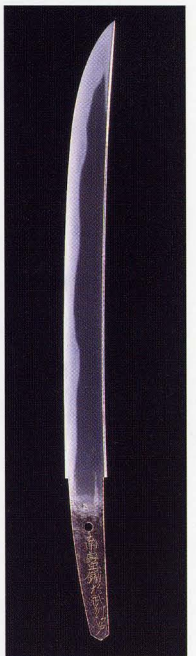


写真1 初代康継作脇指(銘 以南蛮鉄於武州江戸/越前康継)

### 【重高(しげたか)】

「播磨大掾藤原重高」と銘をきる。慶長16年(1611)の年紀のある刀があり、康継とほぼ同年代の刀工と考えられる。康継・国清らとならんで越前松平家のお抱え刀工となり、幕末まで扶持米を給せられていた。8代将軍吉宗により享保年間におこなわれた「諸国鍛冶御改」では、藩内での吟味の結果、福井藩工を代表して重高(3代あるいは4代か)の作刀が幕府へ差し出されている。

### 【継広(つぐひろ)】

2代康継の門人とされる。初代継広は寛文年間に活躍、近江守を受領している。作刀には「越前住」あるいは「於武州江戸」と銘のあるものがある。

### 【継利(つぐとし)】

2代康継の門人とされる。名が一代限りのいわゆる「一人刀工」であるが、比較的多くの作刀が残っている。元禄年間を中心に活躍、継広と同じく、越前国住でありながら「於武州江戸」と銘のある作刀がある。

### 【包則(かねのり)】

初代包則は寛文年間を中心に活躍したとされる下坂派の刀工。筑後守を受領した。銘の名の上に牡丹の紋を刻むものがある。2代包則は江戸へ移住している。

### 【宗道(むねみち)】

初代は寛文年間を中心に活躍したとされる下坂派の刀工。上総守を受領した。以後代々福井藩の御用をつとめており、幕末には江戸に出て、西洋流鉄砲鍛冶の技術の修行にも励んだという。

※受領銘：刀工などの職人が朝廷から授けられた、国司などの官職名を自分の作品に彫り込んだもの。刀の場合特に江戸時代に多い。職人にとっては自身の名誉と作品の付加価値を高める目的があり、朝廷にとっても授与の代償として納められる金品が貴重な収入源だった。

## その他の刀工 ～国清から現代まで～

### 【国清(くにきよ)】→写真2

康継と並び越前新刀を代表する刀工である。初代は信州松代(現在の長野県長野市)出身で山城国の堀川国広の門下という。後に福井藩主となる松平忠昌が松代の領主であった時にお抱えとなり、以後越後高田から越前福井と、主君に従い移住。寛永5年(1628)頃には山城守を受領した。銘の上に菊紋または「菊に一文字」を刻むことで有名。初代以後幕末に至るまで松平家お抱えとして作刀を続けた。

### 【国次(くにつぐ：山城守)】

山城大掾を受領した初代国次は、江戸初期に丹後宮津(現在の京都府宮津市)より福井へ移住した大和太掾正則の長男、あるいは弟とされる。山城守を受領したのは3代目で、寛文年間頃活躍したが越前より江戸へ移住したとされる。作刀には銘の上に菊紋を刻むものも見受けられるという。

### 【国次(くにつぐ：伊勢守)】

古文書によれば、元禄年間に松岡藩主であった松平宗昌(松岡藩2代、後に福井藩9代藩主)より「伊勢守国次」の銘を賜ったとされる。以後松岡にて作刀を続けたようで、福井藩の記録には「松岡鍛冶」として幕末まで名が見える。

### 【興正(おきまさ)】

長曾禰興正。有名な「虎徹」こと長曾禰興里(虎徹入道興里)の門人であり養子。長曾禰興里は近江をルーツとする鍛冶集団・長曾禰鍛冶に属し、戦乱により福井城下へ移住したという。福井城下では甲冑師であったが、さらに江戸へ出て刀工として大成した。興正は興里の甲冑師時代からの門人であるとされている。

### 【清廣(きよひろ)】

森國清廣。現在福井県内で作刀する唯一の刀匠。昭和61年、宮入清宗氏に入門。平成3年に文化庁より日本刀制作承認を受ける。平成9年からは人間国宝・故隅谷正峯氏のもとで刀子制作を学び、奈良時代に唐より伝来の技法・撥鏤(ばちる=染めた象牙に細密な彫刻を施したもの)の技術を会得する。平成20年、日本美術刀剣保存協会主催新作名刀展にて優秀賞受賞。ほか入選・受賞多数。

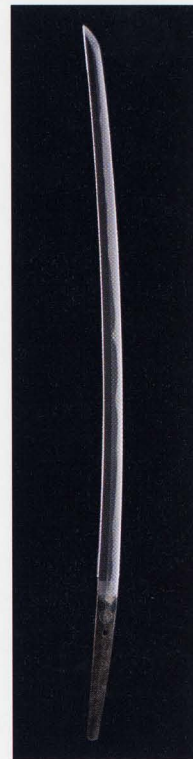


写真2 初代国清作刀  
(銘「菊紋」山城守藤原国清)

## 企画展予告

平成22年12月22日～平成23年3月6日

## テーマ展「越前松平家の名品Ⅶ」

越前松平家伝来の名品をご紹介します。

松平家史料展示室 展示解説シート No.54  
平成22年10月27日発行

## 福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1  
電話 (0776)21-0489 FAX(0776)21-1489  
担当 松村 知也

R100

PRINTED WITH  
SOY INK